

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話 03-3337714649

FAX (03) 329915367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

悔いの残らぬ勝利解決めざして 国労美幌闘争団……………2
あらゆる行動に全力傾注

新しい情勢にふさわしい理論と行動 …………… 3

— 私たちの活動に問われていること —

議員削減より行政のムダをチエツクしろ 山下 けいき…………… 6

— 私の議会 (大阪茨木市) 討論から —

人事交流は組合つぶし、職場つぶし 日刊ちゆうたん…………… 7

介護労働者対象に二つの労働組合結成 …………… 9

一時間でズボンをはいた人が自立 稲村 守…………… 10

— ケアマナージャー交流会から —

特集・灰原茂雄さんを偲ぶ (パート3)

今村 稔…………… 12

金平 博…………… 13

木島 正道…………… 14

小林 隆…………… 15

私の「宝物」…………… 16

読者からのおたより

旬刊 社会通信

NO. 768

二〇〇〇年五月一日号

二〇〇〇年五月一日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

悔いの残らぬ勝利解決めざして

あらゆる行動に全力傾注

ILO勧告を武器に、政府の責任でJRを解決交渉の場に引き出し、紛争の全面解決に向けた大衆行動が全国的に展開されています。

二月一四日から二〇日には第十三波札幌常駐行動（菊池）、同十五日から十七日には第二九波スポーツ上京行動（長縄）、一八日から三月三日には国労北海道上京総行動（長縄）、三月七日から一七日には第四八次上京行動（菊池）、同二十一日から二六日には全道キャラバン・第十四波札幌常駐行動（長縄）が取り組まれました。

昨年発足させた旬オホーツクも、一月末から二月末に瓢子が、二月末から三月六日までと三月末に高橋が、長野本社での業務と要請に応じて県内各地区・単産を回り、伊那市職労の春闘学習会や長野県団結集会などにも参加。文字通り、事務局全員が顔を揃える暇もない毎日ですが、ILOという追い風を活かし切るために、松野、北中、木目沢も、バイト先の有給や公休を活用して、地元の行動はもとより旭川や札幌への日帰り動員や、二、三日の行動から一週間前後の行動にも、バイトを事務局と交代して派遣し、全員参加の闘いを展開してきています。

政府の開き直りは許さない 二月始め、政府はILOに代表者を派遣して、求められていた追加情報等の回答書を提出しました。その中身は行政として再就職斡旋を手厚く行なった事、立法過程と採用手順に違法性はない事、国労も改革法を承認し人道上の観点からの解決を望んでいる事、政党間を中心に政府としても解決の努力を続けている最中である事などらしい（日本政府の委員は当該国だから審査に加われず、他の国の委員からの情報）。日本政府はあくまでも責任回避と正当化を目標む姿勢が見え見えだが、回答が二月になった事で理事会に間に合うか微妙。しかし五月末から六月の理事会（に続く総会）では、日本政府の言い逃れを介さない厳しい勧告が出されると確信しています。

前代未聞JR総連の妨害工作 JR総連は二月八日、ILO本部のあるジュネーブに、国労事件の最終勧告を出させない抗議団を派遣する妨害工作を行いました。しかし、ILO事務局から門前払いを受けたと伝えられています。

国際的にリストラに苦しめられている労働者全体の利益となる中間勧告の意義を理解するより、世界中の労働組合から物笑いのまともにされようとJR経営陣と二人三脚で国労つぶしを優先している。この間、会社側に国労つぶしの不当労働行為を要求し、国労やJR連合の組合員を職務中に集団で取り囲み暴力事件を起こすなど、安全輸送の多大な影響を与えるなど、とても労働組合とは思えない蛮行は目に余るものがあります。

旧動労の活動家が支配しているJR総連を、一企業一組合などと片寄りを超えて癒着した異常な労使関係のもと、彼らを増長させた経営陣の労務政策に大きな責任がある事は明らかです。

私たち美幌闘争団も、JR職場の組合員と連携を強め、正常な労使関係の構築と国労への復帰・加入を働きかける組織強化・拡大を、解雇撤回の闘いとしっかり結合させて闘います。

（国労美幌闘争団『展望』No.89）

新しい情勢にふさわしい理論と行動

— 私たちの活動に問われていること —

(一) 何が問われているか

編集子は、この一二年、全国を飛びあつた。そして「出前学習会」を呼びかけた。昨年来「よしやろう！」と集まり始め、意見交換の結果、次のようなことが明らかとなった。

1、私たちは、共産党やその他の思想潮流をはるかに超える理論的能力と知識をもってゐる。しかし、その「能力」は、いまだ旧「社会党・総評」ブロック内での路線論争の域を出ておらず、一九九〇年代以降の情勢、とりわけ「世紀末」の現在に「能力」と「知識」を適応させる努力が立ち遅れている。

2、「能力」と「知識」を発揮するためには、*「生きた」*情勢をつかみ、理論・能力・知識を具体化し、知識を大衆のものとする努力が問われる。

ある講演会で勤務評定された。そこに「日本をダメにしたのは無責任で人数が多くて、理屈っぽい団塊の世代である」との批判があった。主催者も「これはおもしろい、そのとおりかも」と話題になった。つまり、知識を大衆にひろめ、われわれの精神的影響力を拡大する行動と活動が十分ではないことだ。

3、私たち一人ひとりに「能力」、「力」があるのに、なぜ、影響力を広く大きくできないのか。その理由は、活動家の多くが大企業労組組合員であること、巨大企業ゆえの「企業意識」が、深く浸透していることだ。

批判を恐れず率直に言えば、われわれが批判するユニオン連合、全労連の組合活動・運営と変りない。この欠陥の克服可能性はどこにあるのだろうか。

4、現在の組合活動の特徴は、だいぶ元気になつてはきたが、「大きい」組合員ほど元気なく、「小さい」組合員に元気があることだ。資本の攻撃は「弱い者」いじめを本領とするヤクザ、高利貸しと変りない。彼らは悪魔と同じで、暗闇（くらやみ）に労働者を追い込み、てつてい的にいじめぬく。

資本の攻撃に打ち勝つためには、大資本の悪行非業に「陽（ひ）」を当てなければならぬ。大衆の前に、彼らのみにくい姿をさらすこと、つまり、大衆の前に資本のみにくい姿を明らかにすることだ。「小さい」組合、争議団は陽（ひ）を当て、味方をふやそうと必死だ。他方、「大きな」組合は「小さな」世界に閉じこもるといった傾向をどう克服するかだ。

5、地域ユニオン、名前はカタカナ語だが、実態は地区労である。その地域ユニオン、争議団の仲間が、たとえカラ元気であろうと、「私一人でもたたかう」との気迫と気概が元気の源だ。しかし、大企業労組では、従来の組織運営の習慣から、「わが職場の意識はこうだ」と分析するだけにとどまっている。「だから、こうたたかおう」との方針が求められているというのだ。

6、日常活動がマンネリ化していることだ。これは組合主催の学習・講演会に色濃く現れている。やらないよりはやった方がよい。しかし、創意・工夫が求められるのではない。主催者の気迫が組合員の心に響き、相互に意見交換することだ。現実には、多くの活動

が「消化」に終わっており、一つ一つの活動を未来に向け布陣するという「陣立て」(長期展望のもとにおける活動)にいちじるしく欠けていることだ。「陣立て」を目標に運動を展開している自主的な集いも少なくない。お互いの交流、その中で意識改革は、われわれ前進の必須の課題だ。

(二) 生きた情勢をつかむ活動・交流

こうした状況下、自覚的労働者の任務が問われている。

1、強調しなければならぬのは、私たちに「能力」、「力」があるとの自信をもち、そのために何が必要かだ。

2、私たちに欠けているのは、「生きた」情勢をつかむ活動と行動だ。

3、「生きた」情勢と、「蓄積された能力」が、結合されて真の「能力」になる。

この自覚を私たちが持ち合うことが、現状克服の一步だ。

4、その方策として、旧地区労働的な交流の場を持つことが「力」になる。

5、これに向けての私たち一人一人の「意識改革」である。

私たちにとつての「意識改革」の課題とは何だろうか。情勢の「大きな」変化についてから考えてみる。

(三) 情勢への基本視点

情勢の流れをつかむ

「社会主義世界体制」、旧「総評・社会党」ブロック崩壊は、両者を情勢分析の中心にすえてきた私たちに、大きな打撃となった。中心軸が失われたからだ。

しかし、ソ連、旧社会党がなくとも歴史は進行する。そのために、全労協が結成され、新社会党が結成された。

今、われわれが分析し、結論を出し、たたかう方針を明らかにする途は、現代資本主義は世界をどこに導くかだ。このためには、当面、問題意識を共有する必要がある。

1、市場経済万能主義はどこへ動いていこうとしているのか。

2、市場万能主義とは、「資本の論理」のついで化、つまりムキダシの資本主義だ。これはマルクス、レーニンの時代の資本主義と同じだ。「資本の論理」を制限する社会勢力が消えてしまったからである。

早晩、現代資本主義の矛盾と混乱が明らかになることは必至である。現在がすでにそうだが、その時、①資本主義に未来はなく、②「資本の論理」を世界的に制限することが当面の任務となり、③新たな社会への「価値観」が求められる。

3、そこで私たちの課題になるのが、「価値観」実現の方策(政策)である。政策実現の「力」は大衆の声と力だ。「声」を大きくする政策を私たちはつくり上げていかなければならない。

政策を考える場合、私たちが考えなければならぬことは、①「われわれは少数派」、②味方をふやす、③すでにある根拠地を大きくし、新たな根拠地をつくることである。

全国を歩いていると、旧地区労働を残す運動に全力をつくし、たて・よこの交流が自由闊達になされているところ、各級議員の献身的な活動が地域に根づいているところは、

拠点の役割を果たしている。そして前進している。この活動を学び返すことである。その最大のの拠点が一四年間たたかい続ける国鉄闘争である。

九〇年代、情勢は根本的に変わった

いろんな勉強会で、現代資本主義について考えねばならぬ諸条件が明らかになった。

第一は、世界経済の「グローバル化」（市場万能主義と世界大競争）のゆくえだ。

1、あるところでおこなわれている勉強会は、①会社分割・分社化と商法改正、②国際労働基準の背景・実態、③国際会計基準導入と日本の経営の変化を主なテーマとしている。そこで明らかになったことは、①現代資本主義は、「会社価値」（利潤率、株価、収益率）に基準をおく、投資家主体の経済運営となった、②会社の売買が金融業を媒介におこなわれ、投資より投機中心の経済運営となった、③大独占は買収と合併で「巨大独占」となり、数年後には金融グループを媒介者に、「新たな『超巨大』独占体」が形成され、それにとりもなう「独占価格」がつけられるであろうことだ。

2、その傾向は、日本においても金融（旧財閥）グループ再編成、それに先行する自動車業界、石油・エネルギー、紙パルプの企業再編成にも明らかだ。

3、再編成の結果、もたらされるのが、労働者生活の「絶対的」悪化だ。

第二は、EU（ヨーロッパ連合）ではなぜ社会民主主義政党が政権党になったのかだ。

1、理由はさわめて簡単明瞭、規制緩和に代表される市場経済万能主義が、英・仏・独・伊等のヨーロッパの中心であった旧保守党支持基盤を直撃し、従来の保守党支持者が「社民党」に鞍（くら）替えしたからだ。

2、彼らはいわゆる「中産」階級に位置する自営業者、農民、年金生活者、女性そして労働者階級に属する中間管理職層だ。

日本でも行革、規制緩和で大打撃をうけたのはこの層である。

3、権力者となった「社民党」の政策は、したがって「中産階級」の育成となる。それが、イギリスのブレア、ドイツのシュレーダー、イタリアのダレーマの政策に反映され、現在のアメリカの市場万能主義、従来のヨーロッパの「福祉社会」とは異なる、市場万能主義とは一線を画した「第三の道」である。

日本の経営者団体、ユニオン連合も「第三の道」を模索している。しかし、その本質は二〇〇〇年春闘での「ベアゼロ」、「賃金カット」、「退職金・年金カット」、「人減らし」となったことで明らかだ。したがって、「第三の道」は絵にかいたモチで、ヨーロッパ「社民」にも日本の連合にも未来はない。時代はさらに動く、二〇〇〇年はまさに「世紀末」になるということである。

今、私たちにとつてもっとも重要なことは、敵＝総資本の矛盾を明らかにし、旧社会党・総評ブロック喪失で失われた「対抗軸」を、現情勢の中で明らかにすることだ。三月一八日、逝去された灰原さんは、六〇年安保・三池闘争後の方針を「長期抵抗統一路線」として明らかにされた。この基本原則は、現代が資本主義社会である限り永遠に生きている。しかし、労資の力関係、世界の情勢は根本的に変わった。じゃ、今日の「長期抵抗統一路線」を私たちがどうつくるかである。

議員削減より行政のムダをチエツクしろ

—私の議会（大阪茨木市）討論から—

私が（議員定数に）反対の理由は、議会はより多くの市民の意見を反映すべきだと考えるからです。三二名の議員より三六名の議員のほうが、より広く市民の意見を行政に反映できることは理の当然です。

法を無視する精神

自治法では定数を条例で、「特に」削減できる旨の規定があります。しかし「特に」の意味は、特別の理由に限ってと解釈すべきであり、ただ上限を定めているだけとの見解は法を軽視するものです。しかも本市ではその法定数四四名を、すでに八名削減しています。これを更に四名削減することは、法の精神を無視することにもなります。

第二の理由は、議会には行政をチエツクする大きな役割が求められています。本市では市長以下、約二〇〇〇名の職員が、一年三六五日、公務に従事されています。しかも市の職員は行政の専門家です。職員の仕事をチエツクすべき議員は三六名にすぎません。行政全般をチエツクしようと思えば、三六名全員が猛勉強しても、なかなか追いつかないというのが私の実感です。四名の削減は行政をチエツクするという議会の機能低下につながるものです。

第三の理由は、地方分権が進み、自治体の権限と仕事は増える傾向にあるということですが。このことは当然それをチエツクする、議会の役割も大きくなることを意味します。議会の役割が大きくなる時に議員を減らすのは、逆様ではないでしょうか。これではますます議会の比重が低下してしまいます。

第四の理由は、議会改革にならないからです。削減の理由として「議会改革」が言われています。しかしその方向性、具体性は抽象的で、何ら説得力を持つものではありませんでした。

議会改革は、市民の議員を減らすべきだという背景にある、議会への不満不信を解消するものでなければなりません。必要なのは行政との適切な緊張関係を保つことであり、積極的な情報公開や傍聴者サービスの改善を図るなど市民と議会との距離を縮めることです。さらに特別委員会のやり取りで質問者、答弁者とも認めた公聴会や参考人制度の積極的な活用ではないでしょうか。この点で今回の議論は大いに有意義だったと感じています。

生き生きとした市議会のために

第五の理由は、市議会選挙の活性化につながらないからです。選挙は民主主義の根幹をなすものです。

しかし昨今の投票率は市長選挙ほどではありませんが、投票率の低下傾向が進み、前回は四六%にすぎず、五割を切っています。いつもの顔ぶれによる選挙では、投票意欲は湧きません。若者や女性、はじめて立候補する高齢者などが大勢立候補することが、選挙への関心を高め、投票率の向上にもつながります。投票率が高ければ市議会への関心も高まり、市民と議会との間にも好ましい緊張関係ができ、議会の活性化につながります。この

点で定数を削減し、ハードルを高くすることは、大きな組織候補はいざしらず、多くの市民の立候補意欲をそぐものであり削減には反対するものです。

また高得票者ほど人物評価が高いとの意見もありました。しかし有権者の投票基準は、支持する政党だから、同じ会社・同じ組織だから、地元だから、親戚だから、知っている人に頼まれたからというのも少なからずあり、得票は人物評価以外の、さまざまな要素も含んでの集大成にすぎないことは議員各位よくご承知のことではないでしょうか。

議会費は〇・九%

第六の理由は厳しい財政状況にあり、議会も身を削って範を示すべきだということも削減の理由に挙げられておりました。しかし厳しい時代だからこそ、議会がこれまで以上に何がムダで何が必要かを見きわめることが大事ではないでしょうか。議会費はわずかに〇・九%、この中の四人分の経費を削るよりも、残りの九九・一%がどうなのかチェックすることが、市民が求めている役割ではないでしょうか。行政のムダについて、提出議員の間で十分意見を交換し、あらゆる角度から検討した、膨大な内容だったとの答弁がありました。その内容は一つとして明かにされませんでした。なお私はもとより議会費〇・九%の使途についても論議すべきことについて異論をはさむものではありません。

最後に定数を削減した議会で何ら支障は起きていない、議員は緊張感を持っており、かえって議会が活性化したとのご意見が出されました。しかし客観的な数字を挙げられてのものではなく、納得できるものではありませんでした。

また議会の権威を高めることを強調される提案者もありました。私は議会が行政との緊張関係を保ち、行政へのチェック機能を果たし、市民の意見を本会議や委員会に反映するといった、市民が期待している議会本来の役割を果たせば、自ずと権威は高まるものであると考えています。

(山下 けいき)

人事交流は組合つぶし、職場つぶし

「あんな課長みたことない」

集配分会では、十一月二十七日(土)午後六時三〇分から『松鶴』で、九月七日付で移動のあった六名の方の歓送迎会を、組合員・ユウメイト二九名の参加で盛大に開催しました。今回の対象者は、転出は、堀明男さん(綾部)、柏原敏幸さん(西舞鶴・今回欠席)、転入は、荒瀧保夫さん・矢三好昭さん(東舞鶴)、徳沢宏明さん(宮津)、測上章司さん(三和)でした。

河崎副分会長の司会で、岡田分会長から「十一月八日の分会大会で三期目の分会長となった。いよいよ年繁に入るが、その鋭気を養うとともに、にぎやかに楽しく、組合活動も仕事もやっつけていこう」とあいさつ。対象者五名の方からそれぞれ新しい職場での現状や、いっしょに組合活動・仕事をしていく上での決意が述べられたあと、足立書記長の乾杯の音頭で宴に入りました。

みんな職場での日頃のうつぶん、不満があるようで、特に今の課長の批判も出ていました。「年繁の業研で、課長が説明した後『意見のある人は私か上席課代へ言ってお下さい。これで業研終了』と約五〇分で終わった。こんな課長はこれまで見たことも聞いたこともない」と強い口調で言われていました。

また、「荒瀧さんは、舞鶴支部で自動車共済を一手に引き受けておられたので、転出された後の共済担当者が、四苦八苦している」という話は、みんな初耳でしょう。

田村青年部長の「団結ガンバロー！」で中締めした後も、話は大いに盛り上がりつつありました。

ある大雪の日

二月十六日、近年まれに見る大雪になりました。ここ物部でも五十センチぐらいは積もったと思います。辺り一面真っ白です。

その日はゆうメイトが一人増員でした。しかし雪害はなく、六人で配達。まさかバイクに乗ることはなく、徒歩で配達でした。総合担務どころの話ではありません。四時までかかって局の周辺を何とか配り終えました。

翌十七日も雪が多く残っていました。午前中は、職員の車を使って二、三人に分かれて配達し、午後はバイクで配達でした。

これだけの大雪だったにもかかわらず、管理者から明確かつ適切な指示はほとんどなかったように思います。「指示を待つな。考動職員になれ」と言うのなら指示はいりません。もちろん管理者もいらないうことになります。業務が円滑に行えるよう「管理者」はわたしたち「労働者」を管理するのが仕事だと思っておりますが…。

わたしたちなめられてるんでしょうか。

施策を見直せ！

施策、施策で郵便作業はコスト的に見合うのか？民間のマネもよいが、安く配達というのは少ない機械にしろ、元がかわるのか。

夜間再配も問題がある。コスト的にも、日曜、祝日など夜間再配がない日はほったらかし。

会社になる前に、コスト計算していかない施策を見直すべきではないか。例えば、ふみカード。NTTのマネをして作ったが、ふみカード販売機など、売れた分とひきあつたのか？教えてほしいものだ。

また、営業専担を設けたが、市場計算、コスト計算をして取り入れたのか。コストを少しでも減らすことが急務ではないだろうか。なんだか国鉄の末期を思う…。

郵政はなくなるが、職場は守ることが組合そして当局にも言える。苦しいが頑張ろう。しかし、賃金は減らすべきではない。コストは他に目を向けるべきで、組合員はいい迷惑だ。

人事交流、職場は混乱しています

今、各職場で、今、あなたに期待しています。なるチラシが配られています。それも連

載で。職員育成などを謳い人事交流の良い例ばかりが書いてある。ご丁寧にカラー印刷で、閉じると言わんばかりに二つ穴が開いているのが気に食わん！誰が閉じるか！！お金のムダでは？と思うぞ。そんなん作つとるヒマあつたらもつとすることあるやる！

今やどの職場も、人員削減や事務の多種多様化で忙しいというのに、欠員が出来てもほったらかし、さらに人事交流なるピリヤードのおかげで、職場は大混乱である。忙しくてヒューヒュー言っている職場に人を送り込むことが職場育成なのか？訓練なんて名ばかりで実際はいきなり分からん仕事を任せられ、分からないことを聞く時間もない。周りの職場も助けてあげたいが仕事が山積み。お互い気を遣いグツタリである。結局、最終的にはお客様に迷惑がかかることになる。今ごろ「お客様第一」などといっていること自体が遅れているのに、こんないいかげんな職員育成があるかいな。最近は「お客様の担当者が変わることはございません」という企業もあるというのに、安易に人事交流というのは無責任だ。信頼第一の仕事なのに、自らその信頼を壊しているのではないか？

転職そのものは仕方ない場合もあると思う。しかし、受け入れる体制がない職場に人を送り込むことが、職員育成につながるとはとても思えん。「ワシは何人動かした」などと言っている管理者の出世のために意味のない転職をさせられるなんて馬鹿馬鹿しい。管理者の質を疑う。某局某課には、仕事中に寝るといふ器用な管理者もいるらしい。よほどヒマなのか。われわれ当務者はひたすら働いているというのに。寝るヒマあつたらちよつとは手伝え！つちゆうねん。意味のない人事交流をするくらいなら、働かん管理者を一掃することをすすめします。

今の人事交流は組合つぶどころか、職場つぶしである。

※この稿は「日刊ちゆうたん」から編集部がまとめたものです。

介護労働者対象に二つの労働組合結成

— 個人加盟の職業別労組として —

福祉の概念をすっかり変えてしまふ介護保険制度実施が目前にせまった。福祉サービスすべて商品化され、金で買うことになる。その導入を前に、介護関係労働者を対象とする労働組合が結成された。

「ゼンセン同盟 日本介護クラフトユニオン（略称・NCCU）」（二月二七日結成）と「自治労・東京ケアユニオン」（三月一八日結成）である。

日本介護クラフトユニオンは日本在宅サービス事業協会（この組合の交渉相手）に加盟する二十二社・約一万人で、三月末までには三十七社・一万四千五百、八月中には三万人を目標としている。

この組合の大きな特徴は「クラフトユニオン（職業別労組）の形態をとっていることだ。会社ごとに組合をつくるのではなく、個人が直接「日本介護クラフトユニオン」に加盟する。企業内組合を特徴とする日本の労働組合では画期的な組織形態である。

大会では当面の最重要活動として①組合のない職場で働いている仲間の組織化、②職場組織や支部組織の確立と充実、③企業分会単位、ユニオンの組織で解決することを区分し、もっとも効果ある苦情処理システム構築、④生産性向上運動の一環として利用者の気持ちに応えられる真のサービス向上をめざした教育体系の構築などを上げる。

自治労は昨年九月の大会で、むこう二年間に三十万人の介護労働者を組織化する方針を決定。この具体化して全国に先がけはじめて結成されたのが、「東京ケアユニオン」だ。組織化の対象は自治体や民間事業所で非常勤や嘱託などで働く介護労働者。約四百人での出発である。当面千人の組織化が目標だ。

ケアユニオンの当面の目標は①介護労働者の労働条件改善、②情報提供、③ヘルパー二級の資格取得のための研修会・講座の開設。

なお組合費は日本介護クラフトユニオンでは月収三万以上の者は月収の一・五%、三万以下の者は三百円。ケアユニオンは共済費も集める。

一時間でズボンをはいた人が自立

—ケアマネージャー交流会から—

四月一日から実施される介護保険、その最前線に立つのがケアマネージャー(以下CM)。ここに京都段階での初のCM交流会がもたれ、京都社会保険推進協議会に資料提供されたので一部を紹介する。本質的問題の指摘がされ、興味深い内容となっている。

現在の仕事・住民の状況 「認定が始まって、『私は5だった』『私は4だった』と報告しにきてくれている。介護度5だった人はほっとすると同時に、今後の利用料・保険料の実際の負担が現実の問題となっており、利用する際の不安が増大している。」

「患者さんやお年寄りの不安に答えられる回答が今の制度の中では返せないなかで、自分の中にストレスがたまる。」「訪問調査をしていると行政の下請けをしているような気分になる。本来行政がきちっと実施するべきではないのか。」

「毎日訪問調査に走り回っている。『寝たきり』の患者さんに訪問に行って、調査終了すると立って『ごろうさま』と笑えない話もある。また、従来ヘルパー派遣が無料だったのに、これからお金がいるということ、『もうヘルパーいらん』という人もいる。」

「保険料が払えなくなったらどうしたらいいのか」という質問に答えられないのがつらい。生活保護適用になったら制度の利用がしやすくなるが…」

「資格はあるが、勤務している施設の性格・方針の中で資格が生かしていないもどかしさがある。現場に出ている人、実際の情報を収集して今の仕事に生かしていけたらと思う」

「京都府は、CMを訪問調査員としての位置づけしかない。自治体職員を増やさなくてはむような代行業務としての位置づけではないのか。」

「自治体がすべて訪問調査をしているため、自分たちの資格が生かせない。町は訪問看護は不要と訪問ステーションに対して非協力的。町民には町長が先頭に立って介護保険の説明を行っているが、住民は不安と怒りを感じている。診療所とともに各学区ごとの説明会を始めた。町民の中には四月以降も制度の変化を理解せずに、そのままサービスが受けられると思っている人が多い。」

「CMしだいで認定が左右されるという状況がある。訪問調査のやり方もいろいろあって、技術を持っているCMとそうでない人とは、調査の結果も変わってくる。」

「八五の調査項目をすべて聞くCMと聞いていないCMがいる。項目によって本人に聞きづらかったり、意味のない設問もある。」

「質問のNO. 7などは実際『介護』には直接かわらないのでは?と疑問に思う。」

「だれでもやっていると思うが、調査表は最初は鉛筆で書いて、後で整理しながらポールペンで書いている。」「郡部では二時間くらいの講習で自治体職員が訪問に回っているが、本当にそれでいいのだろうか。自治体職員の個人的な資質に左右される状況も大きい。」「CMでも、調査を受ける患者さんも、ともにある種のテクニクがまとまりつつあるのではないか?」

「郡部では実際にヘルパーが足りない。こうした状況のもとで、本当に介護サービスが提供できるのだろうか。」「南部の市町村では、民間ヘルパー産業の導入を期待しているという自治体があるが、利益が確保できるかどうかという点で、本当に民間企業が参入するのだろうかと不安になる。」「

「病院を出た後で、療養型・老健などに入れない状況が必ず生まれる。これに対してどうしたらいいのか。」「

民間の研修資料は一科目で八千円 「講習会は(二回目、三回目は多少改善されたようだが)、意味がない。一回目の研修は話も聞き取りにくく、CMの質を上げるという内容にはなっていない。」「

「社協の研修はよかった。しかし、情勢も制度も変化しているのだから継続教育制度が必要だ。民間の研修資料は一科目で八千円もする。公的な教育制度の完備が必要。」「

意見書Ⅱ重要な医師の役割 「うちにも意見書が回ってくるが、ふだん、日常の生活をみている医師が書けるわけがない。ホームドクターをしつかり持つていくことが必要となっている。」「意見書を介護保険の意見書だという認識を持っていない医師が多い。診断書と間違えて、症状などを書いている医師もいる。」「

「しつかりと意見書を記入している医師とそうでない医師の差が大きい。関心のある医師は医師会のマニュアルもしつかりと理解し、研修会にも参加しているが、関心のない医師はぜんぜん、マニュアルを使っていない人も多い。勤務医の意見書の不備が特に多い。」「医師も意見書を書くのがたいへんで、通常の業務終了後にはじめて、泊まり込みで記入している医師もいる。」「一通五千二百五十円では人件費も出ない。」「

認定審査Ⅱ人間は生き者 「老健協会などでは、認定審査で重要視される項目、審査の作業をよく知っていれば、自立判定は絶対でないともでいいきっている。」「

「私の調査した、一時間使ってズボンをはいた人が自立と判定されてショック。」「

「患者さんをよく知っている職員が調査するとよく掌握できる。」「

「医師の意見書とCMの調査の差については、CMには状況を聞くが(聞きやすい?)、医師にはなかなか連絡をとらないのが実態。」「

「痴呆の判定のためにあの質問項目でいいのか、あれでは、不十分。痴呆の患者でも午前中と午後で状況が違うこともある。」「

ケアマネージャーの交流 「〇〇区の交流会をしたいということだったが、みな忙しくてできなくなった。互いの地位向上めざしてネットワークを創っていけたらと思う。」「

今後の期待 「訪問調査の方法など、アドバイスが互いにできるような場をつくってほしい。」「府下の自治体の差についても状況把握を。」「

「医療と介護の狭間に置かれる人の具体的な問題を厚生省・府・市に追求することが大切。」「継続を。何年もかかっても続けてほしい。ネットワークを広げるような取り組みを。」「

「これでいいのか、という疑問を持ちながらやってきたので、今日の交流を糧にがんばりたい。もっと交流の場を広げてほしい。」
(稲村 守)

ゆるぎない労働者への信頼

三月一八日という日 なんとという時期になんとという人を、私たちは失ったのだろうか。

灰原さんが私たちに大きな遺産と宿題を残して永遠の眠りにつかれたのは、三月一八日である。この日はいうまでもなく、一二九年前にパリの労働者がバリ・コムニオンという世界史上初めての労働者国家をうちたてた日である。また灰原さんが書記長として自ら陣頭指揮をとった六〇年三池闘争でいえば、この日は第二組合が結成された翌日である。灰原さんにとっては一刻一刻が忘れることのできない日々であったにちがいない。

そんな日に灰原さんが逝去されたことには、使いたい言葉ではないが、因縁めいたものを感じざるをえない。

「理論と実践の統一」の体現者 私は三池・炭労時代の灰原さんにもずいぶんお世話になつており、語らなければならぬ幾多の思い出をもっているが、灰原さんからうけた薫陶といえは、なんといつても社会主義協会時代のそれである。

私は一九七一年以来二十数年間、社会主義協会の仕事をしたが、その大部分は組織部長であった灰原さんの下であった。協会の組織部長という役職は、一九七七年の協会規制の際に学習部長と名称変えを強いられた。理論と実践の統一は組織を媒介として実現されると固く信じていた灰原さんにとっては、この名称変更は、協会の性格を歪曲しようとする攻撃であり、耐えがたいものであったにちがいない。同じ時に、協会は組織の性格規定を「マルクス・レーニン主義者の集団である」というものから「マルクス・レーニン主義を研究する集団である」と変更することを強いられたが、これも「理論と実践の統一」という協会の生命線を「研究のみ」に切り縮めてしまおうとする攻撃であった。私は灰原さんをその組織にあるかぎり「組織部長」と呼びたかつたし、心の中ではそう呼びつづけてきた。

いま私たちは、六〇年三池闘争の四〇年を迎えている。あらためて三池闘争を学ばなければならぬ時に、そのための人格的宝庫ともいうべきかけがえのない生き証人を失ったのである。

この四〇年間、三池闘争の真髄は資本家階級の憎悪の的となり、攻撃にさらされ歪曲、抹殺されようとしてきた。このことはけっして不思議なことではないが、それに加えて、偉大なたたかいがいつもそうであったように、昨日までの戦友が戦列を離れ、陣営を異にする時に、三池闘争はその都度、批判の対象とされてきた。三池闘争に対する敬意は変わらないというふりをして「電通闘争は間違いであった」「国労修善寺大会は再検討の要あり」などの表現をもって、その実、三池のたたかいを辱（はずかし）めるやり方も、今日では珍しいことではない。

三池闘争を歴史の屑籠に放りこみ、あるいはその本質を歪めようとする試みは、今後ますます強まるであろう。

全身全霊をこめた情熱的な口調で、自己批判的総括という謙虚な態度で三池闘争を語ってくれた灰原さんを失って、灰原さんの存在という強い説得力を失って、私たちがはたしてその何分の一をおぎなえるかはわからないが、いまや三池闘争はわれわれの手によって受け継ぎ、再生していかなければならないのである。

労働者を信じて 社会主義協会に関する灰原さんの業績を一言でいえば、協会に対する労働者の信頼をつくりだし、強めたということである。

労働者をこよなく愛した人として、向坂先生と灰原さんの二人の右にでる人を私は知らない。その点で、かねがね「学者はもつと労働者的に、労働者はもつと知的に」といわれていた向坂先生と労働者の闘争精神を燃えたたせてきた灰原さんとは、労働者を協会に惹きつけてきた絶妙なコンビであった。

「今村さん、労働者は偉いねえ」という語りかけを、私は灰原さんから何百回聞いたことだろう。「労働者は成長する」「運動とは労働者が成長することである」ということを、他人がけっして真似ることのできない人のよさで、心の底から信じきっていた人が灰原さんであった。たたかうということと接点として灰原さんとかかわりをもった労働者で、灰原さんに対して裏切られたという思いや不信任をもった人は、一人としていないにちがいない。

国鉄や郵政労働者の反マル生闘争、電通労働者の反合理化・組合民主化闘争、国鉄分割民営化反対闘争など七〇年代～八〇年代のたたかいは、協会や単産ごとの反合併に結集した活動家によって担われたが、それら活動家の闘争意欲の支柱になったのは灰原さんであった。労働者は灰原さんを、灰原さんは労働者を、という相互の信頼と激励がそのままたかひのエネルギーとなった。戦後労働運動史の頂点をかたちづくった三池闘争の指導者という大変の権威をもっていたにもかかわらず、それをひけらかすことは全くなかった灰原さんに対して、活動家は権威に敬意を払いながらも、権威のゆえにはなく、灰原さんが示す労働者への愛情ゆえに、強く惹きつけられたのである。

社会主義協会は数回の分裂を経ながらもやがて五〇年を迎えようとしているが、七〇年代後半から八〇年代なかばにいたる十数年は、協会の歴史の中でもっとも強く労働者を惹きつけ、労働者の信頼を得た時期であったが、そのことを人格的に代表したのが、組織部長灰原茂雄さんであった。

(兵庫・今村 稔)

揺るぎない確信と全力投球

たしか一九八一年以来であるから、二〇年ちかくなる。釧路で開催された国労全国大会での私の発言に、先生が興味を示されそれ以来、親しく助言・指導をいただいていた。

その年の秋に私は、地方本部執行委員になり、後半の二年間は組織部・教宣部の活動を担当した事もあり、旭川でも東京の会議などでも話を聞く機会が増え親しく接するようになった。当時、私たちは春と秋に旭川管内八支部で春闘講座や討論集会を開催しており、複数の講師をお呼びして集中した取り組みを行っていた。灰原先生には、春にも秋にも旭川まで来ていただく事があり、担当する私は三～四日間、朝から夜まで行動を共にした。

行動を共にしながら助言や指導をいただいたのであるが、先生の特徴・印象は何よりも「揺るぎない確信に満ちた全力投球」の姿である。それは、講演の中の言葉や表情にあらわれ、移動や休憩時間の会話の中にもあらわれる。いつも先生は労大の赤手帳を使っておられ、中はメモでびっしり埋まっている。しかも、午前中から学習会の計画が入っているのには、おどろいたものである。すでに六十代の後半であったはずなのに。ある時は、ホテルに迎えに行くと「チェック・アウトを二時間近く延長してほしい」と言われる。おそらく急ぎの原稿でも書いていたのであると思う。

忘れられない思い出で、記憶に残っているいくつかの言葉がある。あの釧路大会のあとしばらくして地方本部にいた私に先生より電話があった。「今度出す本のまえがきに釧路での発言を引用するのでよろしく」という事であった。その後『階級的労働運動の課題』が送られてきた。岩波書店がブックレットを発刊した頃、先生より「このパンフレットは勉強になるよ」といつていただいたパンフレットがある。たしか「臨調行革」をテーマにしたものであったと思うが、以来岩波ブックレットを読み続け今年三月で五〇二号になる。「金平さん、文房具はいいものを使った方がいいよ」と言われ、もとより文房具好きの私は意を強くして相棒のあきれ顔も気にせずいいものを使うようにしている。そしてある時、「彼は立派だ。今日はじつに楽しかった。」と言われた事がある。じつにうれしそうであった。旭川での全講座を終了し、夜の食事に旭川の労働運動に大きな影響を持つ役員に同席してもらい、三人で食事をした後ホテルに向かう途中であった。当時先生は協会の役員でもあり旭川の状態を気にされていたようである。

三池闘争をはじめ三池労組に関するパンフレットや資料も多数いただき、会えばそのつど、必要な助言や激励など思えばこの二十年近く指導いただいた事に心より感謝している。先生が話し私が聞いている場面ばかりであるがじつに楽しい思い出である。しかし、もとより浅学非才の身、先生にははがゆかったにちがいないであろう。

人にはそれぞれ忘れられない表情がある。先生の公演中の表情、仲間の話を聞き入る表情、そして食事をしながら楽しく語らう時の表情など。しかし、私には西新井の住宅をおじやました後、バス停まで見送ってくれ、バスが発車する時のあのこやかなやさしい表情が忘れられない。

(東京・金平博)

これからですよ

「木島さん、これからですよ。お互いに頑張りましょう」。いつもお会いすると笑顔で私を勇気づけてくれました。私は、全電通闘争の末端の一労働者として長年にわたり、灰原先生のご指導を受けてきたことを感謝しております。

灰原先生から一番強い印象を受けているのは、社会の主人公である労働者とは生涯このように生きるのだよ、ということを自らの生活や運動等々の実践で示された事であります。日本労働運動史上最大、最高の三池闘争を指導され、その闘争の中から労働者階級としての路線である「長期・抵抗・統一」を提起したのも灰原先生でした。

しかし、日常の態度、その姿勢は、もの静かで奢りや偉ぶったところは微塵もありませんでした。いつも、どのようなときでもお会いするとこやかなお顔で、そして情熱的に

労働運動について長時間お話をされました。

いま、灰原先生との思い出が私の脳裏に走馬灯のように浮かんできます。「あの時は、ああしてあれば」と後悔ばかりです。

最近では、灰原先生の奥様が亡くなられてから、私たちの仲間と年一回近郊の温泉へと一緒していただきました。

昨年の秋は、茨城県土浦の方で一泊し灰原先生のお話を聞いたのですが、その時「話す時間はどのくらいですか」と問われ、一時間程度と言うと「話すことがいっぱいある二時間はほしい」と言われました、そして立たれたまま私たちに労働運動について一生懸命にお話をしてくれました。この時も灰原先生は鞆いっぱい資料と風呂敷に包んだいろいろな本を準備されてきました。先生のこういう所を見て、遊び半分で来ていた私は痛く反省させられました。私にとつてこの時が先生とじっくりお話し、また、お酒を飲んだ最後となっていました。

私たちは、灰原先生が生涯を通じて貫いてきた階級闘争のすべてからまなび、一歩でも近づく努力をしていくこと、理論を労働者階級としての実践に転化していくことが一番喜ばれる事であると感じています。

(埼玉・木島 正道)

私の「宝物」

小林 隆同志へ ともに明日を切りひらこう！

一九八〇・九・四 全通三三回全国大会 灰原茂雄

今日ではめずらしい万年筆の文字で、力強く書かれた「労働組合運動・農民運動と統一戦線」(テーゼ第二部)が私の手元にある。

灰原さん自身は、七三年一月二九日に購入した旨のメモも残っている。協会規制の中で、テーゼ第二部が規制され、私自身も以前購入したものを紛失し、こまっていた時、東京で開かれた全通全国大会会場で傍聴されていた灰原さんにその旨を話したら前述のメモを記した上、私にプレゼントしてくれました。

七三年の発行以来、灰原さん自身が読み返し学習されていただけに、数多くの赤線・メモも残っており、私の宝物のひとつです。

この「テーゼ第二部」は飾り物として宝物でなく、私の労働組合運動の精神的支えとしての宝物なのです。全通の長期抵抗大衆路線(全通企第一・二号)の運動展開の中で、灰原さんは私の所属する地区本部の学習に何回も見えられ、ゆっくり、わかりやすく講義をされたのが記憶に新しいのです。

自ら三井三池闘争の指導者として、身体で体験されたことに熱弁をふるわれた姿、他人の話はすべてメモをとり、静かに聞き入り、最後にも静かに話しをされる姿、長い人生観のすべてをかけての説得力ある話しに、ついひきこまれたのは私一人ではないでしょう。昨年・今年の正月、年賀状が届かなくなって、少々心配をしていました。滝野さんからの電話にビックリしました。全通運動の右傾化の進む中、職場第一線の指導者が亡くなり残念でなりません、私と灰原さんの接点を思いおこし、ペンを取ってみました。

(全通労働者・小林 隆)

◇ 読者からのおたより ◇

村山氏引退で民主党化が加速 総評の資料ありがとうございました。大分では、村山氏の引退で一気に連合、民主党化が進んでいます。組合幹部は誰一人として労働者の未来など考えていないようです。

(大分・A)

編集部より 全国的にも社民党から民主党への流れは加速しています。それに、社民党の多くは不安と危機感をもちはじめているようです。

力があるのに： 第七六三号の「マホロバ」：読みました。歴史はすきでした。しかし戦前、戦後と現在ばかり見ていたので、とても勉強になりました。そして、今日届いた「新社会」三月二十八号の短信ガーデン、同感。「力があるのに死んでるなと感じました」。

(千葉・N)

地に着いた学習会 いつも楽しみにしております。労働運動の再構築と、政治闘争の強化が問われています。そのために地に着いた学習会を考えていきたいと思えます。

(岐阜・N)

編集部より いよいよこれから。まず拠点をつくる。旧地区労的交流・学習を。春闘そして総選挙 二〇〇〇春闘・総選挙闘争頑張ります。社会通信も頑張つて。

(青森・S)

編集部より 二〇〇〇年春闘の総括どうするのか、みんなが問われます。情報氾濫の中で 今必要な適切、的確な情報を毎回ありがとう。情報氾濫の中でほんとうに勉強になります。滝野さんのご指導、誌面ですが感謝しております。

(神奈川・T)

編集部より 横浜にいったとき、連絡します。久しぶりにお会いしたい。元氣回復 病氣のため、遅くなりました。請求に六ヶ月分加算しています。読むのが元氣回復になります。

(佐賀・K)

編集部より 最近、病氣の方多いのです。ご自愛ください。内容について注文してよ。

(横浜・T)

悲しい知らせと「手紙」 灰原大先輩の悲しい知らせを聞き、さびしい思いがします。今から二年前の京都にて、まなぶ講演会でのお札の手紙をいただきました。今も大事にしています。灰原さんの人柄を彷彿としています。

編集部より 灰原さんの特集号いかがでしたか。遺志に応えようよ。

久々の滝野節 先日の音威子府での学習会の折りに今の時代について学ぶことができ久々の滝野節を聴くことができた。六月には旭川↓名寄↓音威子府に旅します。

(北海道・S)

編集部より 音威子府、楽しかった。六月には旭川↓名寄↓音威子府に旅します。全労連って？！ 転勤して一年二ヶ月、仕事にもようやくなれました。二月に開催された分会大会で書記長に選出されました。初仕事は、国労神奈川バッジ事件勝利の駅長申し入れと春闘の職場環境改善要求の申し入れです。ILO勧告の署名要請で伊東競輪労組へ一〇〇枚、五〇〇人分お願いにいったところ一週間後、すぐ電話があり、集まりましたとのこと。一方全労連系の市職は口ばかりでいまだに連絡なし、闘う全労連の前身は？

(静岡・S)

講演ありがとう 講演の際には遠い所までお出かけいただきまして、大変お世話になりました。お身体に気をつけ頑張つて下さい。

(鹿兒島・K)

編集部より こちらこそお世話になりました。また行きます。本気で「護憲」に 護憲の意識が我々の仲間でも薄れているように思います。衆・参の選挙に対するとりくみについても自発性、自主性が見られません。指示、指令待ちの人が多くみうけられます。改憲はアツという間に通つちやう気がします。本気で護憲に多くの人々が決起を。

(神奈川・Y)

生存権うばう改憲攻撃 「政治」が一部の特権階級のみを利益を露骨に追求されだして数年が経ち、労働者はバサツと首を切られてゆく。うつけきしている不満や「怒り」を、どこに向けるのか。苦心のすえ、古典的に「天皇、国家」に結びつけようとしている。そのための一連の法律が昨年さして議論もされず、成立していった「憲法があぶない」さんに九条だけでない。生存権を奪う改憲に具体的抵抗が必要になつてい。

(横浜・I)

編集部より おっしゃるとおり。生活と護憲のたたかいをどう結合するか。ここです。転勤 転勤命令で通勤が自宅から出来なくなり「社会通信」を扱うことが出来なくなりました。永い間お世話になりました。ありがとうございました。四月から下記部数を送付して下さい。転勤先でも国労で頑張ります。

(福島・I)

編集部より 長い間取り扱いありがとうございました。さらにがんばつて。

(福島・I)

お知らせ 次号第七六九号は合併号(5月11・21日)となり発送は五月中旬になります。